授業づくりの道すじ

教　育　課　程　の　編　成

①　年間指導計画・年間評価計画の作成

学習指導要領や学校教育目標を基に、年間指導計画・年間評価計画を作成します。

○　学習指導要領にある各教科の目標に沿って、学校としての指導の方向性を明確にして作成することが大切です。

○　教科の目標を実現させるため、評価規準についても記載します。

○　児童・生徒の実態や既習の学習内容を踏まえて作成します。

・　評価規準とは、学習指導要領に示された指導内容の実現状況を判断するためのよりどころとなるものです。

②　単元(題材)の目標・評価規準の設定

児童・生徒の実態や年間指導計画・年間評価計画の作成を基に、単元（題材）の目標・評価規準の設定をします。

○　単元(題材)の目標や評価規準を設定し、それに基づいて、具体的な授業の流れを考え、指導内容と評価計画を作成します。

・　１単位時間の中で３つの観点全てについて評価規準を設定し、その全てを評価し学習指導の改善に生かしていくことは現実的には困難であると考えられます。教師が無理なく児童・生徒の学習状況を的確に評価できるように評価規準を設定し、評価方法を選択することが必要です。

・　単元(題材)構成の中で、それぞれの観点を工夫して全体でバランスよく設定することが必要です。

③　授業の準備

○　指導内容と評価計画を基にして、単元(題材)の指導計画(授業の流れ)を組み立てます。

○　授業の組み立てに沿って、評価規準をより具体的に設定します。

○　「努力を要する」状況の児童・生徒に対する手立てを考えます。

・　思考力・判断力・表現力等を育むためには、各教科等で言語活動を充実することが必要です。

④　授業実践

○　単元(題材)の指導計画を基に、指導のねらい(本時の目標)を明確にします。

○　思考力・判断力・表現力等の育成を意識した授業を行います。

○　児童・生徒に評価をフィードバックし、学習の振り返りを行わせます。

※　学習評価に関する参考資料

○「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
（令和２年３月予定　文部科学省　国立教育政策研究所）
○学習評価の在り方ハンドブック
（令和元年６月　文部科学省　国立教育政策研究所）

☆集団と個の関係

学校教育は、集団での活動や生活を基本としています。児童・生徒一人ひとりが存在感をもち共感的な人間関係を育むために、互いの身になって考え、相手のよさを見つけようと努める集団を形成することが求められます。そのため、全教職員が同じ意識で取り組むことが大切です。

【例】小学校算数科（第3学年　「A　数と計算」）

各教科によって違いがあるので、【「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料】で確認しましょう。

単元名	内容のまとまり
あまりのあるわり算	第３学年［Ａ　数と計算］（４）「除法」

１　単元の目標

（１）割り切れない場合の除法の意味や余りについて理解し，それが用いられる場合について知り，その計算が確実にできる。
（２）割り切れない場合の除法の計算の意味や計算の仕方を考えたり，割り切れない場合の除法を日常生活に生かしたりすることができる。
（３）割り切れない場合の除法に進んで関わり，数学的に表現・処理したことを振り返り，数理的な処理のよさに気付き生活や学習に活用しようとしている。

２　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①　包含除や等分除など，除法の意味について理解し，それが用いられる場合について知っている。 ②　除数と商が共に一位数である除法の計算が確実にできる。 ③　割り切れない場合に余りを出すことや，余りは除数より小さいことを知っている。	①　除法が用いられる場面の数量の関係を考え，具体物や図などを用いて表現している。 ②　余りのある除法の余りについて，日常生活の場面に応じて考えている。	①　除法が用いられる場面の数量の関係を考え，具体物や図などを用いて表現しようとしている。 ②　除法の場面を身の回りから見付け，除法を用いようとしている。（「わり算探し」など）

３　指導と評価の計画（１０時間）

時間	ねらい・学習活動	評価規準・評価方法 知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1・2	余りがある場合でも除法を用いてよいことや答えの見つけ方を具体物や図などを用いて考える。 余りがある場合の除法の式の表し方や，余りなど用語の意味を知る。	・知①（ノート分析）	・思①（活動観察，ノート分析）	・態①（活動観察，ノート分析）
3	余りと除数の関係を理解する。 ・余りと除数の関係を調べる。	・知③（ノート分析）		
4	等分除の場面についても余りがある場合の除法が適用できるかを考える。 ・等分除の場面で，答えの見つけ方を考える。		○思①(活動観察，ノート分析)	
5	割り切れない場合の除法計算について，答えの確かめ方を知る。	・知②（ノート分析）		
6・7	日常生活の場面に当てはめたときに，商と余りをどのように解釈すればよいかを考える。 ・商を＋１する場合やしない場合について，それぞれ考える。		・思②（活動観察，ノート分析）	○態①(ノート分析)

記録に残す評価の機会は「○」
指導に生かす評価の代表的な機会は「・」

教　育　課　程　の　実　施・評　価

・評価活動

○　授業実践を通して評価した結果を、学習指導の改善に生かしていくことが重要です。

○　個人ごとの評価結果を記録します。

○　一人ひとりの学習状況を見取ることができるような評価活動を行うためには、例えば、評価シートなどを活用することも考えられます。

⑤　単元(題材)の総括

○　単元(題材)構成の中で、それぞれの観点を工夫して全体でバランスよく評価することが必要です。

○　各授業で収集した評価資料を基に、単元(題材)の目標に対する実現状況を観点ごとに評価し総括します。

（Ａ：十分満足できる
Ｂ：おおむね満足できる
Ｃ：努力を要する）

各学校で、組織的・計画的に取り組みましょう。
学習評価の妥当性・信頼性を高めましょう。

⑥　各学期・各学年の学習状況の総括(評価・評定)

○　単元(題材)ごとに総括した各観点の評価結果から、観点別学習状況の観点ごとの総括を行います。

○　観点ごとの評価の総括から評定への総括をします。

（小学校では３、２、１
中学校では５、４、３、２、１）

・　児童・生徒の評価・評定などは、複数の目でチェックをすることが大切です。

～保護者や児童･生徒への情報の提供～

学習評価に関する情報をより積極的に提供し、保護者や児童・ 生徒の理解を進めることが重要です。
どのような評価規準、評価方法により評価を行ったのかといった情報をわかりやすく説明しましょう。

【例】単元(題材)ごとの評価シートを活用した児童・生徒の学習状況の見取り

○　単元(題材)の終了後に、収集した評価資料を評価シートに記入します。

児童・生徒一人ひとりのよい点や可能性、進歩の状況については、「個人内評価」として、児童・生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で児童・生徒に伝えることが重要です。

単元（題材）ごとの評価シート【例】

【資料】各時間の評価と単元末の評価（Ｋ児とＴ児）

	次	第１次					第２次		第３次			児童の様子等に関するメモ	単元の評価の総括
	時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
Ｋ児	知									B			B
	思				C					B		・図を使って説明する際に，等分除と包含除を混同しており，指導が必要だった。（第３・４時）	B
	態							B			B	・ブロックや図を使って進んで考えようとしていた。（第１時）　・日常生活に結び付けることができた。（第10時）	B
Ｔ児	知									A			A
	思				B					A		・余りの意味について自力解決の段階では誤答だったものの，対話的な学びの中で気づくことができた。（第７時）	A
	態												

児童・生徒一人ひとりの学習状況について、顕著な事項がある場合などは、その特徴をメモしておくことも考えられます。

単元（題材）末に総括を行う際、例えば、評価結果のＡ、Ｂ、Ｃの数が多いものがその観点の学習の実現状況を最もよく表現しているとする考え方や、評価結果のＡ、Ｂ、Ｃを数値に置き換えて合計したり、平均したりする総括の方法などが考えられます。
思考・判断・表現の観点では、２つの評価記録において、単元の後半に児童の学習状況の改善が見られたことを基にした総括の考え方を示しています。
単元における観点別評価の総括については様々な考え方や方法があり、各学校において工夫することが求められています。

【例】評価の方法として

観察・点検

行動の観察
学習の中で、評価規準が求めている行動の「観察」をします。
記述の点検
学習の中で、机間指導などにより記述の内容を「点検」します。

確認

行動の確認
学習の中で、行動などの内容が、評価規準を満たしているかを「確認」します。
記述の確認
学習の中で記述された内容を、ノートや提出物などにより「確認」します。

分析

行動の分析
「行動の観察」や「行動の確認」を踏まえて、その内容を「分析」的に評価します。
記述の分析
「記述の点検」や「記述の確認」を踏まえて、ノートや提出物などの記述の内容を「分析」的に評価します。